

二〇二三年一月二一日

ちやんちやんこ企業戦士の面は無く
寒風に揺るるおでんの赤提灯
幼子の笑顔のピース冬ぬくし
歌留多よむ声恋歌に上ずりぬ
灯ともせば結露の玻璃は万華鏡
貼りたての障子灰かに朝日射す
少年の淡い口ひげ春隣

二〇二三年一月二〇日

風花の路地にひしめく先斗町
霧氷林窓に触れもす電車かな
マルチングとれば生き生き冬野菜
雪降るやしづかにほどく仕付糸
湯治場の長き廊下や雪明り
大寒に耐ふのど飴をまろばせて

二〇二三年一月一九日

懐手して漁師らの沖見癖
寒風に研ぎ澄まされて月孤高
ペンギンの親子さながらスケートす
石段に折るる我が影日脚伸ぶ
水の面をたたら走りに鴨翔ちぬ
青空の透けて疵無し初水
懐手解いてくぐりし注連柱

二〇二三年一月一八日

雪山を転がり落つる風を見よ
つる鬱蠟梅の黄に癒やされぬ
鬼の的を発しと射抜き弓始
忘の字の闇に灯るや阪神忌
風花の神馬の睫毛くすぐりぬ
女正月湯船に浮かぶ絆創膏
花筒の氷を割りて供花を挿す
湯もみ女の高窓に舞ふ細雪

たか子 しみえ 素子 智恵子 千鶴 千鶴
もとこ うつぎ 明日香 ひのと 凡士 やよい
ひのと 凡士 凡士 凡士 凡士 凡士
素子 素子 素子 素子 素子 素子
もとこ うつぎ 明日香 ひのと 凡士 やよい
素子 素子 素子 素子 素子 素子
もとこ うつぎ 明日香 ひのと 凡士 やよい

をさなごのみやげ話や雪うさぎ
片方は淀の葦原冬の虹
生き延びし汝れも鬼籍や阪神忌
真つ白な雪の沖より船もどる
息白く天突き朝礼体操す

二〇二三年一月一七日

小さき口開け待つ孫に蜜柑剥く
凍てついて尖る轍や山の道
冴ゆる夜の家のどこかが軋む音
しづり雪避ける術なし墓の径
石ひとつ生の字におく震災忌
震災を知らぬ瞳や冬茜
少年ら正座凜凜しく寒稽古
寒風にテニスボールのよろけけり

二〇二三年一月一六日

川凍るひとひらの葉を封じ込め
農一筋豊作祈り鍬はじめ
野地蔵の雪を払ひて合掌す
小走れば枝から枝へ枯木星
着膨れて津波の報に怯えけり
とんど火に燃ゆ直会の紙コップ
雪道を夫の靴跡なぞりつつ

二〇二三年一月一五日

春近しプラスマ思考へ転じけり
母の味探り白菜漬けにけり
女正月三人寄ればよく笑ふ
尼寺の寒の厨に灯の点り
竹爆ぜて宮に餅すどんどかな
舞ひ終へし帯のほてりや垂り雪
命毛を利かせ一卷初写経

あひる せいじ ひのと みきお
凡士 せいじ ひのと みきお
もとこ 凡士 凡士 凡士
もとこ 凡士 凡士 凡士

毎日句会みのる選・二〇二三年一月三日